

## 北東アジアの平和と日本の役割

国際交流 NGO 「ピースボート」 代表

川崎 哲 さんの講演から

直前の歌で、大熊さんが「歌に国境はない」と言われたが、ピースボートも「地球一周の船旅」と言って、「世界一周」とは言いません。地図では国により色分けされ、国境が引かれています。実際には色も線も引かれている訳ではありません。

前が拉致問題という重たい闘いをされてきた話なので、その後でこの地域の平和問題を話すのは緊張します。

蓮池さんは右・左の話しをしましたが、ピースボートも社民系ですね、と言われます。

2002 年～07 年の間、NGO の民間平和団体で、ピョンヤンを土台に地域の平和問題を議論し、活動してきましたが、その間にも北朝鮮のミサイルがあり、日本の侵略戦争による諸問題を解決するために活動すると、「右」から抗議や脅しのメールや電話が掛かってきます。ピースボートは 1983 年辻元清美さんが学生と始めましたが、選挙に出たときに彼女は外れました。しかし、その後も左右の文脈の中に置かれています。同じように、拉致被害者の中でも政治が絡んでいます。国家による人権侵害が起これば苦しいのは人間。政治レベルとの乖離を生じます。

ピースボートは色々な取り組みをしています。市民であるからこそ活動できること、市民であるからこそ持てる視点を話したいと思います。(以下、資料を参照しながら講演)。

### ピースボートと被爆者地球一周、証言の旅

ピースボートの始まりは、日本政府に過去の



戦争の反省がなかったため民間レベルでアジアの人々と和解しようと、1983 年に船旅をした事からです。1990 年には冷戦が終わり、地球市民の意識を持って世界全体を見ていこうと最初の地球一周クルーズをしました。2005 年には韓国 NGO と開国 60 年ということで、共同クルーズ講演中の川崎 哲 氏

を実施しました。昨年から被爆者を招待して、各地で時間は限られているが証言集会を開いています。核を持ちたいと言う国が増えている中で、あらためて核軍縮の世論を盛り上げたいと考えました。それらの国は核を一つの武器程度と考えている事に対して、人間の視点から核兵器(被害)の実態を知ってもらうために証言をしてもらいました。その一つにペルーの首都リマ近くの砂漠地帯に 40 年程前から難民が自分たちで民主主義を徹底させた運営をしているビジャ・エルサルバドルという数十万人の村があります。そこで、証言集会を行いました。この村で 1980 年代後半にセンデロ・ルミノソと言う毛沢東主義集団のテロが広がりました。自分にはその政治的な背景を理解できなかったのですが、テロを受けた家族からの証言を聞いて、背景はどうあれ被爆者の証言と同様に、実際に起きた暴力と恐怖の事実が問題であると感じました。憲法前文には平和に生きる権利が書かれています。拉致被害

者も平和に生きる権利を脅かされると言う点では同じことで、ここが大事なのではないかと思います。

## 北東アジアは世界で唯一冷戦構造が残存

2002年から6年間ほど取組んだ事は、戦争が起きれば悲惨。戦争をどうすれば予防できるかを考え、「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ」(GPPAC:ジーパック)を立ち上げました。これは国連の呼びかけでもあります。

2005年に「東京アジェンダ」を開催。そこでは北東アジアは冷戦構造がいまだに残存する世界で唯一の地域であり、軍備・軍隊が集中している、例えば軍事費はアメリカが世界の50%で最大だが、東アジア地域は13%を占める。中米地域より数倍から数十倍多い。紛争が無い地域である事を考えると、異常に集中している事が分かる。この冷戦構造を市民レベルで取り除くことが必要であることを訴えました。

2006年は北朝鮮の金剛山で平和会議を開きました。平和共存のためには基地の撤去を含む軍縮と脱軍事化が必要なこと、平和的協力関係として人道支援・災害協力などがあり、四川大地震の災害協力は日本への関心を大きく変えたこと、文化交流は様々あるが日本は過去の戦争責任の清算をすること、経済では環境問題を含めて共通のルール作りなどが議論されました。

## 冷戦構造の象徴である核兵器の廃絶と北東アジア非核地帯構想

モンゴルは、ロシアや中国に囲まれています。憲法で「非核」を定め、国連で「一国非核地帯」宣言をした国です。近隣諸国と対等外交関係を結び、韓国や北朝鮮とも国交を持っています。北朝鮮でGPPACを開催しようとしたが実現できなかったため、モンゴルで実施し、北朝鮮から参加できるようにしました。残念ながら最終的には参加はキャンセルされましたが。しかし、モンゴルと台湾を含めた非政府組織の「市民版六者協議」を追求し、冷戦構造の象徴であ

る核問題について、北東アジア非核地帯構想を議論しました。

ハンス・ブリクス氏(元国連イラク査察委員長)はイラク戦争に反対し、最後までブッシュ大統領と交渉した人。2006年の「大量破壊兵器委員会」の報告書の中で、核を持つ国がある限り他の国も持とうとする、全面的に核兵器を非合法化する必要がある、と印象に残る言葉を述べています。

北朝鮮の核実験について、キム・チャンス氏(統一マジ政策室長)は2006年にソウルで開かれたNGOの会合で、北朝鮮のねらいを①アメリカに対する交渉カードを持つ事 ②国内向けに「強い北朝鮮」を示す事であると分析し、北朝鮮に対してこれに対応する「軍事的手段に頼らず、他の方法で体制を維持する方法があるということをつからせる」ために、基軸となる「国(北朝鮮)の再建プラン」を提示する必要があると述べています。

## 冷戦構造に終止符を

オバマ大統領はプラハ演説で「冷戦思考に終止符を打つため、米国の安全保障戦略の中での核兵器の役割を減らす」と演説しました。来年一月には核不拡散・核軍縮に関する国際委員会があり、オバマ大統領の核廃絶を東北アジアで実現する最初の一步は「核の先制不使用」です。それを日本政府は抵抗しています。「北朝鮮の脅威」と言っている人々は、「核の傘」の庇護には手を付けようとしません。「核があるから平和だ」と信じている外交官や政治家がいる。平和ボケ・安保ボケです。

## 憲法9条を国際平和のメカニズムに

9条世界会議を昨年行いました。アイルランドなど暴力に苦しんだ国の人々は9条を選び、話し合いが必要である事を痛切に感じています。一国では平和は実現しないし、9条は日本一国では生きられません。資本主義か社会主義か、テロとの戦いと言う事ではなく、軍事によらない、脱軍事で平和を築くこと、特に東アジアの

人々は冷戦構造を取り除くために結束すべきです。



## < 参加者の感想より >

### \*蓮池 透さんの講演について

- ・拉致の問題がよく分かりました。今後世論を盛り上げまだ北にいる人を早く返してあげたい。
- ・国の外交の主体性のなさのなせるところが進展なしの理由、六者協議やアメリカ頼みではなく、日本対北朝鮮の問題なのである。唯一つ日本の外交力にかかっている。だから今の政治を我々一人一人が働きかけ動かしていく必要あり。
- ・マスコミに報道されなかったことを教えていただいた。政府の二枚舌など。
- ・日本と北朝鮮のその時の状態、今、これから考えていくことの大切さを思いました。  
(マスコミに流されることなく)
- ・いろいろな思いが伝わってきました。  
世論の怖さを感じました。
- ・拉致問題の難しさをひしひしと感じました。
- ・家族ならではの具体的な話を聞いてよかった。
- ・具体的で分かり易く、苦渋の歴史を感じられて良かったです。
- ・めったにお聞きすることの出来ない方からお話をお聞きすることができ、大変貴重なお話が聞けた。

### \*川崎 哲さんの講演について

- ・日本の政府や役員を核廃絶に向かわせるためにはどうしたらよいのだろうか。平和憲法を守る、核をなくすという声を大きくしたい。
- ・平和な世界のためのネットワークを国の枠を超えて作り上げる努力の必要性を痛感させていただきました。
- ・分かりやすく、知らなかったことを説明いただいた。「人間の権利としての平和」という言葉を重く感じ、地域で広めていく事を決めました。
- ・核軍縮の世界の流れの中で日本がその中での抵抗があるとは驚きです。
- ・理想論とされる平和のための対話の大切さを改めて感じる。
- ・メリハリのあるお話で分かりやすかった。
- ・資料が分かりやすかった。
- ・よいお話でした。もっと次回も連続して聴きたいです。
- ・力強い大変貴重なお話を色々お聞きすることができた。



## 憲法俳句・憲法短歌の募集！

3月13日の「中央公民館のつどい」での講演会『日本国憲法と遊ぼう』において、講師の中村裕二さんが市民の皆さんから寄せられた憲法俳句・憲法短歌を紹介しながら、日本国憲法のつくられた背景や意味など、憲法への熱き思いを語ってくれます。

日本国憲法に用いられている日本語を使って、俳句または短歌を作ってお寄せ下さい。

送り先：〒201-0014 狛江市東和泉2-20-12-103

みんなの広場 宛

またはFAX03-3480-6794

あるいはEメール minnanohiroba@jcom.home.ne.jp

## 講演会

### 『日本国憲法と遊ぼう』

日時：3月13日(土)

午後6時30分～8時30分

会場：中央公民館(市民センター)

2階 第3会議室

講師：中村裕二さん

(弁護士・こまえ9条の会呼びかけ人)

## <投稿>

狛江市猪方の小川再治さん(学芸大学名誉教授)  
より夏の平和フェスタにちなんだご投稿を  
頂きました。

### 「戦争否定者の早乙女勝元氏 一氏の講演への感想」

約10年前に朝日新聞に氏の戦争中の小学校時代の回想文が載った。氏の学校で、勝ち抜きとは逆の負け抜きの角力大会が開かれ、最後まで負け抜いたのは、弱虫の氏だった。体操教師は、「お前は、兵隊さんになれない非国民だ」と罵倒したとか。この酷烈な体験が、氏の弱虫への優しさとか、反骨などを生んだ原点だった。

今回、氏の講演記録を読み、氏の原点が氏その後の御活躍の出発点になっていることを改めて確認した。

実は、私も小学校で氏と酷似した経験を持っている。氏と同様に非力な私は、体操の時間にクラスで唯一人高跳びに失敗し、教師に非国民呼ばわりされたのだ。これは私にやはり反骨と優しさへの憧れを与えた。83歳の私は、氏よりも数年年長だが、お互い軍国主義に適応できない人間だった。氏にこの件について私信を送った所、「お互いよく似ていますね」とのお返事があった。

氏の講演で私が強く感じたのは、(1) 東京大空襲、(2) 戦中の国民の寿命の短さ、だった。(1)については、当時憧れの高校に入ったが、反骨意識の強かった私が殺されかけたことがある。B29の搭乗員が気まぐれに投じた一弾が私に命中しかけたのだ。もし爆死したならば、鬼哭啾啾の内に夭折しただろう。自分で言うのも恥ずかしいが、私が後に渡米し、日本では絶対入手できない障害児研究資料を持ち帰れなかった。

(2)については、氏によれば戦中の日本人の平均寿命は男が二〇代、女が三〇代だった。戦争は我々の寿命を原始人時代の様に短縮してしまう。私は個人的には人の命は国家よりも大切だと思っている。(早乙女氏もそう思っておられるのではないだろうか?) 戦時中国民を、国

を守る醜の御盾としか思わなかった軍国日本に対する私の反感には、すさまじいものがあった。

私は短期間、陸軍二等兵だった。大阪の四師団だったが、この師団は「またも負けたか四師団」といわれた位弱かったので、勤務が楽だろうと思っていたが、「軍隊に学問はいらんのだじや」と殴られる毎日だった。そして毎日爆弾を抱えてアメリカ戦車に体当たりする訓練をさせられていた。

終戦の日の嬉しさは忘れられない。上官は腑抜けの様になり、私に「どや、嬉しいやろ」と言ったが、これは私の本心を衝いていた。勿論口では「飛んでもありません」などと答えていたが。

早乙女氏は私より若いので、悲惨な軍隊生活を味わうことは無かった。これは氏のために幸運だったと、つくづく思う。氏の今後のご活躍を祈って止まない。

「憲法の恩恵を最も受けていないのが沖縄だ」と涙ぐみながら沖縄の人が訴えられた。  
本土の大新聞の社説には、沖縄の現状より「日米同盟」を重視する論調が強い。  
私たちの九条を守る運動は沖縄の人々と心をつなげて進めなければと改めて思う。